

いっこうどう【夜叉袋 一向堂】

いっこうどう

(夜叉袋の)田面に、一向堂というのが古河の近くにあり、この仏刹(寺院、仏閣)を大川の浦に移して大福寺という。その一向堂の古跡にも庵(草葺きの小さい家)がある。その庵を尚、一向堂と人は云う。この馬手(妻手とも書く、右手)に内外の神垣(神明宮)があり、弓手(左手)に寄せ木の観音菩薩を祭る堂がある。

1998年 八郎湯広報 菅江真澄と八郎湯「夜叉袋」

畠山四郎

いっこうどう

一向堂村は蝦夷湊近くに一向宗寺が存在したものが洪水などで移転を余儀なくされ、大川に移建した。それが今の大川・大福寺である。

一向堂村は夜叉袋に含まれたが、その下町に一向堂地番があってその名残りを留めている。

1998年 八郎湯広報「地名と歴史」ふるさと散歩 107

畠山四郎

いっこうどうむら 一向堂村

〔中世～近世〕戦国期から見える村名。出羽国秋田郡のうち。天正19年正月17日豊臣秀吉が秋田実李の当知行地を安堵した朱印状写に、「うら町村・一かうた村」336石余とある(秋田家文書)。八郎湯残存湖東岸、夜叉袋に東接した一向堂の地に比定される村。鎌倉末期に一向宗大福寺を建立(大福寺はのち大川村に移建)、または真言宗一向山泉流院の所在地ともいい、この寺院の存在が地名の由来をなすという(町史)。諏訪神社境内および付近の畑地に貞和5年等南北朝期の板碑5基が現存。開村は古いとみられる。

戦国期には浦城主三浦氏の領下にあった。湊合載で三浦氏は没落。「文禄元年秋田家分限帳写」では鎌田河内守の代官所支配、「慶長6年秋田家分限帳」では栗沢弥五郎の代官所支配の村として、ともに一向堂村81石余と記載(秋田家文書)。これが当時の当村認定石高であろう。

近世秋田藩政下では、「義宣家譜」慶長7年9月

27日条に、「一日一向堂村」のうち宝鏡院に100石、金乗院に20石の寺領を交付と記載。元和4年3月6日向左近から人見宮内に宛てた「一川堂新開」の指紙写がある(払戸渡部家文書)。まだこの頃は村名を継承していたとみられるが、まもなく夜叉袋村に包摂。

文化年間に「野舎箇・田頭に一向といふが古河のべ近くあり。一向堂の大福寺のふる跡にも庵ありて、尚一向堂といえり。此馬手に諏訪の社あり」という(ひなの遊び)。現在は小字に一向堂の地名が現存。

1980.3出版 角川日本地名大辞典 5 秋田県

いっほんぎ【夜叉袋 一本木(老本木)】

馬場目川が夜叉袋側にあったとき、ここ的一本木に船着き場があった。ここから向かいの鳥崎のあたりまで舟の渡しがあったと聞いている。(農免道路の工事の際に切られてしまったといわれている)

1998.7 中羽立 村井西二郎談

うけとりまえ【浦大町 受取前】

調査中

うしろやち【夜叉袋 後谷地】

「谷地」の項参照。

うすがぐち【浦大町 白ヶ口】

位置 森山の北側の麓。東側の「ウンガツグツ」と西側の「バッタ」という二つの沢に囲まれる。

うとう【浦大町 善知鳥坂】

うとう